

## あとがき

このたびの展覧会は、昨秋サンパウロで行われた第19回サンパウロ・ビエンナーレに出品された山田正亮の1986～87年制作の油彩およびドローイングを展示するものである。別言するとサンパウロからの凱旋展ということになる。サンパウロの会場では1983年の油彩の大作(182×456cm)が展示されたが、この作品はすでに1983年10月の山田正亮新作展で当画廊で展示され、ただいまこの作品は高松市美術館に納まっていることもあり割愛した。もっとも現在の当画廊の展示スペースでは展示しようにもその余地がないのであるが……。

カタログのテキストは東野芳明さんにお願ひし「サンパウロの山田正亮」をご寄稿いただいた。厚く御礼申し上げる。標題のとおり、このエッセーでは、サンパウロビエンナーレのこと、そしてそこに出品された山田正亮の作品について述べられているので、お読みいただきたい。

ところで、このたび私は美術出版社から、「画廊のしごと」なる題名で、美術エッセー集をこの5月に出版した。この本の表紙は山田正亮のサンパウロ出品のドローイングのなかの一点を使用した。私はこの本の表紙は山田正亮で行こうと当初から迷うことなく心に決めていた。では一体、どの時代のどの作品を選ぶか、については美術出版社の椎名節さんと協議の末、最近作のドローイングにすることで意見の一致をみたのである。私は山田正亮のブルーが好きなので、ブルーっぽい作品を選んだ。本の表紙ということもあり金地の紙を使用したので、いささか

淋派風の感じとなったが、私としては大変満足しているのである。

最近の山田正亮の仕事をみていると、一層の伸びやかさ・自在さを感じさせる。キッチリとした分割の枠が次第にはずれ、そのおもかげはキリリとした十文字の線に残るのみとなっているが、それだけドローイングの動きの楽しさが観る者にジカに伝わってくるのである。このみずみずしい美しさはどこから来るものであろうか？私は地層を幾重にも通り越し、分析しがたいミネラルを含んだ比類ない水滴が、山田正亮のただいまの作品のように思えるのである。思考、観念、理知そして孤独等々の各地層をくぐり抜けしたり落ちる感性の流露が、最近の山田正亮の作品だ、と私は思うのである。

この5月28日から3週間、山田正亮新作展がベルリンのギャラリー・シュプリングルで開催される。これはベルリン・東京現代美術交流展(朝日新聞社、東京ゲート・インスティテュート主催)として開催されるもので、すでにこの4月11日から30日まで、当画廊ではギャラリー・シュプリングルから送られてきた、イナ・バルフスの作品を展示した。この交流展はベルリンと東京の現代美術の画廊がそれぞれの作家を交換し合って展示するという企画展である。ベルリンの空のもと、山田正亮の作品がどのように見えるか、評価されるか、興味あるところで楽しみにしている。私は山田さんと一諸に5月27日のオープニングパーティに出席できるようベルリンへ出掛け、6月6日の当画廊のこの展覧会のオープニング・パーティに出席できるように帰国の予定でスケジュールを組んでいる。

最後に山田正亮さんの益々の御健勝を祈る。

1988年5月12日

佐谷画廊

佐谷和彦